趣旨説明

渡部 森哉
（南山大学・教授／人類学研究所・所長）

今日はお越しいただきありがとうございます。人類学研究所の設立70周年という節目に、これまでの人類学研究所の歩みを振り返り、この人類学研究所をどのように継承して未来へつなげていくのかということを議論するために、シンポジウムを構想いたしました。

とは言うものの、研究所の歩みを振り返るということはすごく難しいことが分かりました。初代所長の沼澤喜市先生も書かれているのですが、沼澤先生も所長になったときに、どんな経緯で、どんな構想で人類学研究所ができたのか全く分からなかったということです。そして、後でお話が出てきますが、シュミットの下でこの研究所が設立されたと理解されているのですが、シュミット自身がこの研究所の構想にすごく不満があったということも書かれています。

研究所のことを調べようと思っても、これは大学の組織であると同時に神言会と非常に深い関わりがあり、ここで活躍した人類学者の多くが神言会員であるため、神言会に問い合わせないと分からないことがたくさんあります。ということで、人類学研究所と神言会の関係、そして、人類学研究所の歴史自体が非常に大きなテーマとなっております。

今日のシンポジウムは、1回で完結するものではありません。今年から「『大きな理論』と『現場の理論』」というテーマの共同研究会を始めました。それは例えば、今回扱うシュミットが構想した大きな理論が、日本というフィールド、現場でどのように受容され、そしてローカル化されたかということなどを事例に考えることです。これから、それぞれの研究者がそれぞれのフィールドの事例に従って、理論がそれぞれのフィールドでどのように受容されたかということを議論していく予定です。

今日の話題の一つであるシュミットは、そもそも神言会の神父でした。人類学者としての立場と神言会の立場としてシュミットを理解しなければいけません。今回は、神言会士であり、そして人類学者である、人類学研究所の元所長でありますクネヒト先生に、そのことについてお話しいただきたいと思います。クネヒト先生には、これまで人類研のほうで２回ほどインタビューをさせていただき、それをビデオ撮影し、今後ウェブでアップする予定ですので、そちらも併せてご覧いただきたいと思います。

そして、シュミットについて語るにはドイツ語圏の人類学に精通していなければいけないのですが、今回、シュミットを語るのに最適な研究者であります、東北大学の山田先生にご登壇いただきます。その後、人類学研究所のこれまでの歩み、とくにここ10年の歩みを後藤明先生に語っていただきます。後藤先生はこの10年、どのようなビジョンで人類学研究所を運営してきたのか。そして、どのように未来に繋げていくのかを語っていただきます。

今の3名の方にご登壇いただく計画は、実はもう今から１年以上前に決まっておりました。そして、今日、最後にコメントをいただく伊藤亜人先生はクネヒト先生の昔からのご友人であ

り、クネヒト先生の研究の方向性を決めたというか、影響を与えた人類学者の一人だと伺っております。ですから、伊藤先生は人類研の歩みに間接的に関わっているということで、今日のシンポジウムのコメンテーターとして非常にふさわしい方だと思います。

今日の登壇者、コメンテーター、そして、お越しいただいた参加者の皆さんにお礼を申し上げまして、挨拶とさせていただきます。